

Lead

All roads *lead* to the future リード

コミュニケーションペーパー

2022 春号
Spring

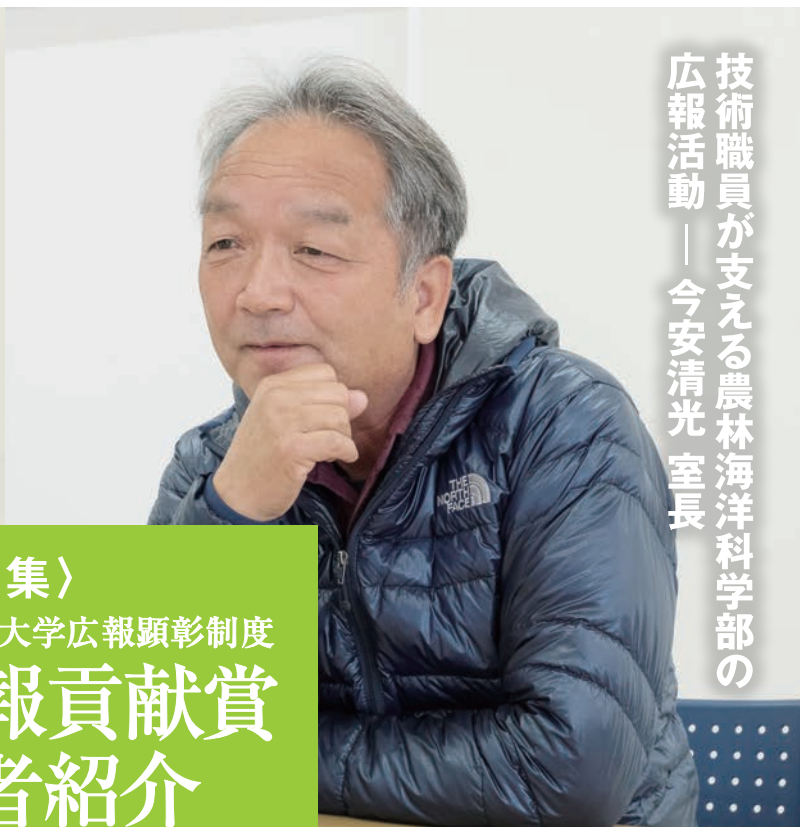
No. 038

¥0
TAKE FREE

地域の人と手を取り合い絆を深める
情報誌を発行——玉里恵美子教授



技術職員が支える農林海洋科学部の
広報活動——今安清光室長

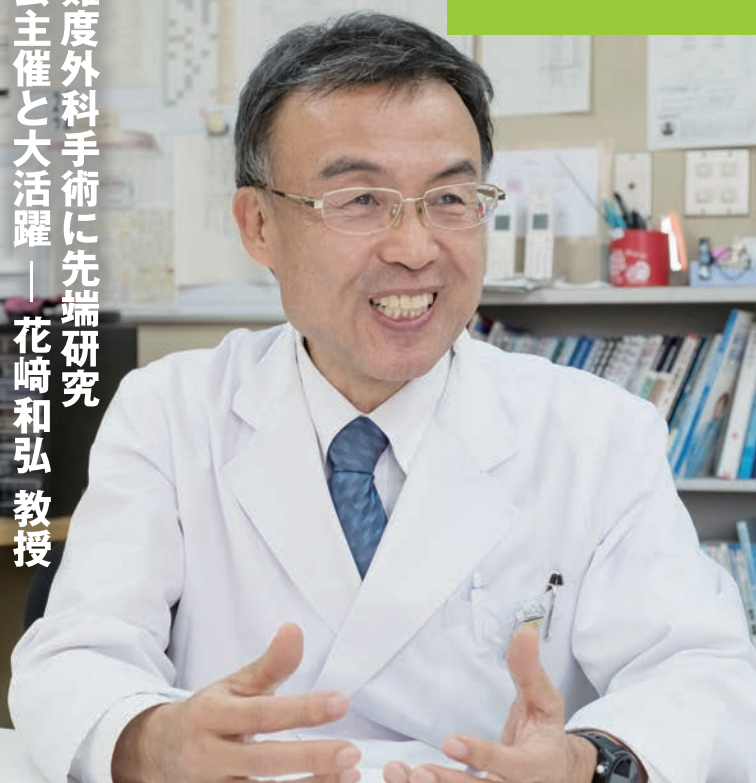


〈特集〉

令和3年度 高知大学広報顕彰制度 優秀広報貢献賞 受賞者紹介

広告顕彰制度とは、積極的な情報発信や創意工夫を凝らした取組を通じて、高知大学の広報活動をけん引する優れた活動を行った教職員等を学長が表彰し、広報マインドの醸成を図り、高知大学における広報活動の活性化と一層の発展に資することを目的としています。

高難度外科手術に先端研究
学会主催と大活躍——花崎和弘教授



基礎科学の面白さを国内外に向けて
情報発信——田島裕之特任助教



農林海洋科学部の学部案内やホームページなどには、学生たちの学びを紹介する写真が多数掲載されています。

これらの多くを撮影しているのが、フィールド技術室室長の今安清光さん。ほかにも長年、多彩な活動を続けてきました。

貴重な実習の場である 南国フィールド（農場）と 嶺北フィールド（演習林）を整備

今安さんは農林海洋科学部に12名配属されている技術職員のトップ。業務は非常に幅広く、南国フィールドと嶺北フィールドの維持管理、実習の指導、研究のサポートなどを行っています。

「南国フィールドでは水田・施設園芸・果樹の栽培や収穫、土佐あかうしの飼育管理などが日々の業務です。嶺北フィールドは127ヘクタールほどで、人工林も自然林もあります。林道の整備や間伐、伐採などを行って管理するのが仕事です。一般の農家さんと同じような仕事も多いですね。」



▲嶺北フィールド

南国フィールドでは週1回実習、嶺北フィールドでは年間1ヶ月程度実習を行うので、学びの場として使えるように、常に整備しておかなければいけません」

こうした多忙な業務に加えて、今安さんは実習の様子を積極的に撮影し、たくさん記録を残してきました。以前から、今安さんはカメラ撮影が趣味。あるとき、

教員から実習の写真を記録してほしいと持ち掛けられ、以来、自ら進んで撮影するようになったそうです。

「10年前に孫が生まれて、その写真を撮るためにカメラを買ったんですが、学生を撮影するほうがずっと多い。プロではないから、数打ちや当たる方式で、とにかくいっぱい撮るようにしています。あとで整理するのが大変なんですけどね」と今安さんは笑っています。

学生に身構えさせないほうがいいかと、携帯電話でわからないように撮影した時期もあったとか。しかし、撮られているのに気づかないのでリアクションがなく、面白い写真にならないことが続いたそうです。そこで考えを改め、カメラをきちんと向けて撮影するように。これで学生は笑顔になり、ポーズを取ったりと、絵になる反応をしてくれるようになったといいます。

技術職員が支える 農林海洋科学部の 広報活動



▲第2回 高知大学フォトコンテスト大賞「フィールドサイエンス実習「田植え」」

今安さんが撮影した写真には、学生たちが実習に臨む活き活きとした姿が写っています。学びの様子を紹介するのにうってつけだと、これらの写真は農林海洋科学部の学部案内やホームページに使われるようになりました。なかでも好評なのが、南国風情を感じさせるヤシの並木をバックに、学生たちが田植えをする様子をとらえた写真です。「平成30年度高知大学フォトコンテスト」の大賞受賞作品で、大学案内の農林海洋科学部を紹介する誌面で大きく扱ってもらいました。雲と学生の組み合わせがけっこいいんじゃないかな、と思います」

今安さんの写真は、南国フィールドを紹介するホームページでも多数使われています。じつは、これらのホームページは

学生たちの学びの姿を 大学案内やSNSで紹介

令和3年度
高知大学広報顕彰制度
優秀広報
貢献賞
総務部物部総務課
フィールド技術室 室長
いま やす きよ みつ
今安 清光

窪川高校農学科卒業。国鉄勤務を経て、1981年から高知大学職員。実家の家業が農林業で、幼いころから農作業を手伝う。「山を歩くだけで楽しいので、休日も演習林へ。ここは10年ぶりだなとか、ここで危ない目にあって死にかけたな（笑）なんて思いながら」



▲Facebook



▲土佐あかうしの赤ちゃん



▲Instagram

写真だけでなく、動画の撮影にもチャレンジ。先日は土佐あかうしの出産に偶然出会い撮影しました。「子牛が立ち上がるまでを動画に撮ろう」と思いカメラを向けました。ところが、早朝の寒い中、なかなか立ち上がらない。心が折れかけたところ、ようやく40分ほどして立つてくれました」と今安さん。これを短い動画に編集して、Instagramなどにアップしようと考えているそうです。

炭焼きや小学校への出前授業 など多彩な地域貢献活動も

今安さんは大学外での地域貢献活動にも取り組んでいます。そのひとつが、ドラム缶を使った手軽な炭焼き体験。南国市と高知大学の共催事業として、10年余り実施しました（コロナ禍で2年間休止）。嶺北フィールドから切ってきたアカガシや竹を使用。参加者がドラム缶に入れて火をつけ、1週間後に完成した炭を搬出しに来る、といった手順で行っていました。リピーターも多く、評判を呼んだイベントでした。



▲炭焼き体験



▲山で葉っぱを採取（出前授業）



▲採取した葉っぱの特徴を学ぶ（出前授業）



▲ツリーハウスを建築

高知市の小学校への出前授業で10年以上上務めている環境教育講師も好評を博しています。「森林に関する講座をしてほしい」という依頼を受けて行ったものです。学校近くの山に行つて、実際に樹木を見て葉っぱなどの特徴を学んでももらいました。森林や樹木に少しでも興味を持つてもらえたら、という思いで接しています」

ほかにも四万十川財団での樵塾（きこりじゆく）の講師、梶原町でツリーハウス作りなど、さまざまなイベントやワークショップを実施。技術職員として培ってきたフィールドでの技術を活かし、地域貢献活動を行ってきました。



「何というか、写真撮影に関しては、今を記録しておかなければという使命感から起きているですよ。それもこれも、農林海洋科学部の環境がいいからです。この素晴らしい環境が、よくを撮影や地域貢献活動に駆り立てるんでしょね」と今安さんは熱く語ってくれました。

地域の人と手を取り合い 絆を深める 情報誌を発行

地域協働学部稲生実習班の学生たちと地域住民のチーム稲生の皆さんが協働でつくる

2018年11月の創刊以来、現在まで2カ月に1回発行されています。
発行を楽しみにされるまでに成長した『いなぶっく』のこれまでを振り返ります。

「ガチンコ」で地域と向き合い こぎつけた創刊号

表紙には稲生地区の自然や季節の美しい写真。ページをめくると、地域で行われた行事の報告や活躍している住民の紹介、地域に伝わる昔話などなど。発行部数300部からスタートした『いなぶっく』は現在、600部を超える部数が新聞折り込みで配布されるまでになりました。

「始まりは、集落活動センター『チーム稲生』の活動を周知するために広報誌をつくってはどうかと、学生たちが提案したことでした」と話すのは、稲生実習班の学生を指導する地域協働学部の玉里恵美子教授です。集落活動センターとは住民が主体となつて、地域の活性化を図る取組を行う仕組みです。チーム稲生では拠点施設である「稲生ふれあい館」で交流のための



▲高知新聞でも紹介されました

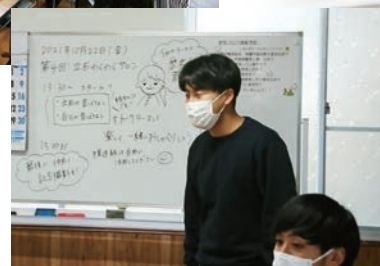
いなぶっく創刊号▲

「同地区に出向き見聞きし、チーム稲生の役員の皆さんと話し合う中で、チーム稲生の存在が知られておらず、参加者も一部の地域に限られていることに学生たちは着目。『チーム稲生を稲生全体へ』をコンセプトに、課題解決のためのツールとして広報誌を提案したのです」と振り返ります。

とはいえ、すんなりと受け入れられたわけではなかったそうです。誰が取材・編集をするのか、印刷費用はどうするのか、どのように配布するのかなど、クリアしなければならぬ問題がいくつもありました。学生たちはチーム稲生の役員と協議を重ね、制作から配布までの体制を確立。地域のことを一番よく知っている役員から情報提供を受け、創刊号の発刊にこぎつけました。



▲立石わくわくサロン



▲住民のアイデアをファシリテート

令和3年度
高知大学広報顕彰制度
優秀広報
貢献賞
地域協働学部
(教育研究部総合科学系 地域協働教育部門 教授)
たま ざと え み こ
玉里 恵美子

大阪府出身、龍谷大学大学院文学研究科単位取得満期退学。博士(社会学)。高知女子大学(現・高知県立大学)社会福祉学部准教授などを経て、2009年高知大学に着任。14年より現職。「学生たちは授業以外にも集まって、編集作業をやっています。2カ月に1回の発行は本当に大変。よく頑張っていると思います」

皆さんにとっても喜んでいただいて、学生の自信につながりました。学生は楽しみながら稲生について学ぶことができ、地域の方には稲生の再発見になるといつていただいています。」と玉里先生は話します。

プロの目から見た 厳しい評価も糧にする

『いなぶっく』制作のこだわりは、チーム稲生との協働作業という点です。誌面で取り上げる内容について、まず学生たちが提案。それをチーム稲生が住民目線で検討し、あるいは違うテーマを推薦するといった方法で内容を固めていきます。取材編集は学生が担い、大学の協力を得て、学内で印刷。最後に学生たちが自ら手折りして完成します。

「あくまでも学生とチーム稲生の協働で発行することを意識してきました。文字校正の作業もチーム稲生の皆さんに参加してもらい、誤字脱字、名称などのチェックを一緒にやっています。学生主導ではありますが、地域の皆さんとしっかりコミュニケーションを取りながら、より良い誌面内容を目指すような体制になっています。これは



▲住民と一緒に防災マップ作り



▲世代を越えて楽しくゲーム



▲トマトパスタを調理

稲生実習班に限らず、地域協働学部の地域との向き合い方そのもの。地域づくりを一緒にやっていきたいと思いますというスタンスです」PDCAサイクルの実行も、『いなぶっく』制作の特徴です。Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の頭文字を取った品質改善方法。改善を繰り返すことで継続的に精度を高める手法です。『いなぶっく』もこの手法に基づいて、学生とチーム稲生の皆さんで内部評価を行うとともに、専門家による外部評価も受けています。「プロの目から見た厳しい批評もいただくようにしました。その結果、学生たちから甘えが抜け、取り組む姿勢が格段に変わりました」と評価を受ける意味を話します。

オンラインで地域とつながり コロナ禍でも活動を

2020年に入ると、コロナ禍の影響で地域を訪れる実習が困難になりました。そのような状況でも、『いなぶっく』は発行を継続させます。

「21年度も前期は1度も稲生に行くことができませんでした。そんな中、チーム



▲何度も住民と話し合う

稲生の皆さんとは、ビデオ会議システムを使って編集会議を行いました。取材もリモートで。学生同士すら直接会うことなく、すべてオンラインで制作した号もあります」

このようなことが可能になったのは、まず稲生の拠点である稲生ふれあい館にビデオ会議システムができる環境があったこと。そしてチーム稲生の皆さんがリモートでの『いなぶっく』づくりを受け入れてくれたことにある、と玉里先生は考えています。

「オンラインでの活動は、むしろ楽しいと、皆さんに言っていたできました。現地取材ができない学生に代わって、地域の行事の写真などをチーム稲生の皆さんに提供していただくなど、以前よりも連携が密になった感もあります」とコロナ禍の中、新たな歩を力強く踏み出しました。

学生達は『いなぶっく』制作以外にも、稲生での活動を行っています。例えば3年生は2021年度、稲生ふれあい館で開催しているふれあいサロンの「出張サロン」を稲生内の立石集落で2カ月に1回実施し、集いの場づくりを行いました。「こうした活動は、いずれ住民に引き継ぐべきものだと考えます。学部では学生が地域で教育されるだけではなく、地域の方の社会人教育も目指しています。学生に依存するのではなく、互助で助け合える地域づくりです。『いなぶっく』も学生の活動をベースにしながら、協働体制で継続して続けていきたいと考えています」と今後の展望を語ります。

新聞折り込みによって、稲生地域のほぼ全戸に配布されるようになった『いなぶっく』。地域での存在感が増し、発行を楽しみに待っている住民の方もいます。今後も地元に着目した情報の提供で、地域の絆を深める存在としての活動が期待されます。



▲サロン地域の方とのクリスマスイベント



基礎科学の面白さを 国内外に向けて 情報発信



重要で有意義なのはわかるが、
難しそうでとっつきにくい…。
こうした基礎科学の素晴らしさを
一般に広く伝えたいと考えたのが、
元・理工学部門特任助教
(現・東京大学大学院助教)の
田島裕之先生。
そのユニークな活動を紹介します。

ボランティアで 積極的にアウトリーチ活動

田島先生の専門は、一般の人にはあまり馴染みのない理論物理学。なかでも量子多体物理学が研究テーマのメインで、冷却原子気体(絶対零度付近まで冷却された原子の気体)、中性子星(恒星が超新星爆発を起こして残る特殊な天体)といった最先端の理論を研究しています。

「ちよつと、とっつきにくいですよ。そこで、基礎科学にもっと興味を持ってもらいたいと、高知大学にいる間、アウトリーチ活動を行いました。少しでも楽しんでもらえたら、クスクスと笑えてもらえたらいいな。大学での研究とはまったく違うもので個人的なボランティアでの活動です」
アウトリーチ活動とは、研究者が一般の人たちに研究内容をわかりやすく伝えること。



優秀広報
貢献賞

令和3年度
高知大学広報顕彰制度

元・自然科学系理工学部門
特任助教

田島 裕之

埼玉県出身。慶應義塾大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻物理学専修修了。博士(理学)。2019年10月から21年3月まで高知大学で特任助教。21年4月から東京大学大学院助教。「アウトリーチ活動にうつつを抜かしていると言われることがあるので、研究も頑張っています(笑)」

YouTube
物理チャンネル
「田島 裕之」



ペンギンのフンの飛び方を 運動方程式を使って計算

田島先生はまず、YouTubeで情報発信。自分のチャンネルを立ち上げ、「ドクター・タージ」の名のもと、基礎科学をわかりやすく解説する動画の公開を始めました。こうした活動のおかげで、論文に発展したものもいくつかあります。そのひとつが『ペンギンのフンの噴射軌道および直腸圧の再検討』。ペンギンは排泄する際、お尻を上げてフンを遠くへ飛ばす習性があります。子育て中、ほとんど離れない巣を清潔に保つためだそう(諸説あり)。論文では、フンがどういった軌道を描き、どこまで飛ぶのかを明らかにしました。

研究の舞台となったのは、高知市にある桂浜水族館です。田島先生はこの水族館とコラボでアウトリーチ活動をしたと訪問。飼育員の方と話をするうちに、研究のヒントを得ました。「ペンギンのフンがすく飛ぶので困っているそうなんです。飼育舎を掃除中、顔にひっかけられることもあるとか…。どれほど離れていたなら大丈夫なのか、目安を知りたいと持ちかけられました」

研究の舞台となったのは、高知市にある桂浜水族館です。田島先生はこの水族館とコラボでアウトリーチ活動をしたと訪問。飼育員の方と話をするうちに、研究のヒントを得ました。「ペンギンのフンがすく飛ぶので困っているそうなんです。飼育舎を掃除中、顔にひっかけられることもあるとか…。どれほど離れていたなら大丈夫なのか、目安を知りたいと持ちかけられました」



桂浜水族館での活動

田島先生は牧野植物園に何度も足を運んで、葉の構造などを細かく観察。実際に人乗せるわけにはいかないので、防水ビニールシートと発泡材で模型を作って実験することにしました。

オオオニバスの上に 中学生は乗れるのか？

調べてみると、ノーベル賞のパロディ版として有名な「イグノーベル賞」で、まさしくペンギンのフンをテーマにした研究が受賞していることがわかりました。「その論文を読んでみると、ペンギンの直腸圧がすく強いことなどの考察がありました。非常に興味深い研究内容ですが、視点を変えればアップデートできるのではないかと考えました」
イグノーベル賞の研究では、フンは真すぐに飛ぶと仮定していましたが、実際には放物線を描いて飛んでいくはず。田島先生は「ニュートンの運動方程式 $F=ma$ 」などを使って、フンの軌道から飛ぶ距離などを改めて計算。最大距離は1.34mであると明らかにしました。これを論文にして発表すると、「大きな反響があり、海外でも主要なメディアで紹介されました。イグノーベル賞受賞者のマイヤー・ロホさんからも、メールでメッセージをいただいたんですよ」と田島さんは顔をほころばせます。

「模型設計・作成を通じて課題解決型学習の実践—オオオニバスの浮力はどれくらい?—」という論文もユニーク。高知市の高知県立牧野植物園ではオオオニバスが栽培され、毎年、葉の上に子どもを乗せるイベントが開催されることから発想しました。乗れるのは小さな子どもだけなのか?と興味があるじゃないですか。実際に検証してみようというスタートしました」



作成した
ハスの模型の構造



プールに模型を浮かべた
実験風景

この研究の大きなポイントは、論文タイトルにある「課題解決型学習の実践」。高知中学の協力を得て、生徒9人が参加する課外活動として進められました。「まずオオオニバスの構造について学んでもらい、どうすれば中学生が乗れるのかをグループディスカッション。アイデアを出し合ってひとつの案にまとめていきました。そして模型を作り、最終的には学校のプールに浮かべて、乗れるかどうかトライしました」

生徒たちは自分たちで考え、身をもって物理を体験。普段の授業とは違う、優れたアクティブラーニング(能動型学習)になりました。

論文に発展したもうひとつのアウトリーチ活動が、香南市にあるテーマパーク「アクトランド」の協力を得た『船型人力遊具「ライジング号」のパラメトリック励振』。人力で動かす遊具がたくさんあり、物理学、力学を体感できる場所です。ライジング号はブランコのような動きをする海賊船で、その動き方の数値計算や運動解析をしました」



アクトランドでのアウトリーチ活動

高難度外科手術に 先端研究、 学会主催と 大活躍

「スーパー・リージョナル・ユニバーシティ」を掲げる
高知大学の理念を体現しているのが、
医学部外科学講座教授の花崎和弘先生。
高難度手術や先進的な研究、学会主催など、
幅広い分野で大きな実績をあげています。

人工臓臓療法の開発や
漢方の薬物動態試験など、
世界で初めての研究も

❑ 難易度の高い手術や治療に加えて、多くの人を救うための最先端の研究も、医学部の医師に課せられた使命です。花崎先生がこれまでに発表した論文は420編にのぼります。そのうちの325編は高知大学に赴任してからまとめました。「私は高知で成長させていただきました。花崎は高知大学に来てから花が咲いたんですよ」と笑います。

花崎先生の研究のなかでも特筆されるのが、新しい人工臓臓を使った療法です。人工臓臓は以前からあったものの、旧型はとても大きくて臨床現場ではあまり使えなかったそうです。コンパクトにできないかと、花崎先生は産学共同で研究し、小型化に成功しました。これは世界初の研究で、画期的な療法を確立したと厚生労働省も高く評価。2016年に『人工臓臓療法』と正式に名づけられました。この功績によって、花崎先生は現在、日本人工臓臓学会の理事長を務めています。「テクノロジーが医療を変えると、私は思っています。近年、医工学系の技術がものすごく発達しているの、うまく利用することが大事ななんです」と花崎先生は力を込めます。



人工臓臓療法STG-55の組み立て



漢方のADME試験の様子（高知大学）

漢方に関する重要な研究もあります。研究は漢方薬を数多く扱う医薬品メーカー、ツムラと共同で行われました。じつは漢方薬がなぜ有効なのか、科学的にはまだ解明されておらず、米国では臨床で使うことができません。ツムラは米国進出を図り、FDA（アメリカ食品医薬品局）の認可を得ようと、花崎先生に薬物動態試験を依頼してきたのです。

「西洋医学の薬は単成分ですが、漢方薬には複数の成分が含まれています。薬物動態試験などできるのか、とも思いましたが、大建中湯という漢方薬で試すと、重要な成分を血中ですべて検出できました。漢方の成分が人間の体に流れることを初めて証明したことになります」

研究は高知大学とシカゴ大学の共同研究として実施。研究結果は米国で「高知メソッド（高知の手法）」と呼ばれ、高知大学から世界に発信

ブラック・ジャックに
憧れて外科医に

花崎先生は大学を受験した当時から、絶対に外科医になると決めていたそうです。その大きな理由のひとつが、手塚治虫の漫画『ブラック・ジャック』に影響されたこと。「じつは漫画と同じような症例に出合ったことがあります。内臓逆位といって、内臓の位置が左右逆のケースです。ブラック・ジャックは助手のピノコに鏡を持たせて、それを見ながら手術をしました。でも私はそのまま行っただけです。ブラック・ジャックよりもすごいんじゃないか、とうめばれましたね」と冗談まじりに話します。



人工臓臓療法STG-55の臨床応用（術中管理）

した画期的な研究となりました。大建中湯のほかにも、六君子湯と抑肝散でも薬物動態試験が行われ、同じように成分を血中で確認することができました。

この研究は地域振興に役立つ可能性もあります。県中部の越知町では漢方の生薬を栽培しており、「FDAに承認されたら、越知町で作られた生薬が米国で販売されることになります。スーパー・リージョナル・ユニバーシティとして地域に貢献し、地域と学問が一体となって発展するワインウインの関係になりたいですね」と花崎先生は話します。

花崎先生は2017年に高知大学に開設された光線医療センターの初代センター長にも就任。最先端の光線医療の研究を指揮しています。また2019年からは、農林海洋科学部で海のウイルスを研究している長崎慶三教授らとコラボ。世界に例のない海洋医学・海洋医療の分野でも研究を進めています。

高知で大きな学会を
立て続けに主催

外科医としての実績、研究者としての功績が認められ、2018年の「第27回消化器疾患病態治療研究会」を皮切りに、学会の主催もたびたび依頼されるようになりました。

花崎先生が専門とするのは、外科のなかでも肝胆臓臓外科。なかでも、高難度肝胆臓臓外科手術を数多く行ってきました。これまでに手掛けた手術は1000例以上。人口の少ない地方の大学病院としては、相当な数です。

「手術がうまくなるには、ある程度、数をこなす必要があります。もうひとつ、本当に上手な人の手術を見ることも大事。私は若いころ、国内外のいろいろな場所を訪ねて、素晴らしい先生方の手術を見てきました。こうした経験は本当に大きかったですね」と話す花崎先生。一人前になったという自覚はいまもなく、「自分自身をすごいと思ったときは凋落の始まり。だからと思っているうちは、まだまだ成長できるから大丈夫です」と静かな口調で語ります。



主催した学会

なかでも最も大変だったのは、2019年11月に開催した「第81回日本臨床外科学会総会」。「歴史のある学会で規模も大きく、会員が1万9000人くらい。皆さん、どこかの大都市で開催するのだらうと思っていたようです。『高知でやります』と伝えると、『正気ですか？』といわれましたが、『高知でやらないのならお断りします』と答えました」

1万人以上を収容できるような大会場はないので、複数の会場で開催。シャトルバスを運行するなどの工夫によって、何とか無事に行うことができました。「すごく心に残る学会だった、と皆さんいつてくれてうれしかったですね。開催の翌月には、武漢で新型コロナウイルスが発生しました。以来、日本ではこれほど大規模の学会は開催されていません。『高知が最後の大きな学会だったなあ』とよくいわれます。私はとても運がいいんですよ」

ほかにも2020年以降、コロナ禍のなか、3つの学会を高知で主催。万全の感染防止対策が奏功し、感染者を1人も出すことなく終えました。「私は2022年3月に外科学講座教授を退きます。集大成のときに、自分が研究してきた学会の大会をすべてやらせていただいで完結しました。やり切った感が満載です」と笑顔で語ってくれました。



令和3年度
高知大学広報顕彰制度

医学部外科学講座
(教育研究部 医療学系 臨床医学部門 教授)

はな ざき かず ひろ
花崎 和弘

長野県出身。新潟大学医学部卒業。博士（医学）。信州大学外科及び関連病院を経て、2006年から高知大学医学部教授、日本外科学会認定医・専門医・指導医など資格多数。「師匠に当たる先生から、『体の動くうちは手術をせよ』といわれたのを守って、いまも手術をやっています」

優秀広報
貢献賞

第5回高知大学フォトコンテスト 入賞作品の発表について

第5回高知大学フォトコンテストの入賞作品を決定しましたのでお知らせします。
今回のコンテストでは、下記のとおり作品を募集し、学内選考委員及び学長、理事
(広報担当)による審査の結果、7作品が入賞となりました。

募集テーマ:「#わたしのキャンパスライフ」
募集期間:令和3年7月16日～10月18日
応募対象:高知大学学生、卒業生、教職員



金賞 ヤシとハロ

撮影者:宮武 敢司

太陽の周りに虹の輪ができる「ハロ現象」をメインストリートで見ることができました。負けじと太陽に向かって聳え立つメインストリートのワシントンヤシがハロ現象を引き立てていました。たまには空を見上げるのも、いいもんだな。



金賞 育林実習(新植)

撮影者:今安 清光

嶺北フィールド(演習林)での育林実習で、スギの苗木を植えている森林科学領域の学生達です。

銀賞 シンボルツリー

撮影者:はまちゃん

センダンの木の上をちょうど飛行機が通り、秋晴れのなか抜群の存在感を現わしていました。



大賞 新緑のトンネル

撮影者:小野寺 健一

大きな長い緑のトンネルをぬけると、そこは物部キャンパスだった。



銀賞 高知大学卒業2

撮影者:ティナ

大学生活を共にした友人と最後の写真。

銀賞 なにしてんの。

撮影者:にんじんまん

幼児教育コースの前の畑で撮影。玉ねぎの根っこを土に見立てている友達の横で、友達が突っ込みを入れている。



特別賞

お仕事帰りの空、
二本の虹、感動。
撮影者:今城雅之



物部キャンパス正門付近で思わず立ち止まって、パシャリ。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う学生支援(募金)のお願いについて

高知大学では、コロナ禍で大きな影響を受けている学生を支援するため、募金のご協力をお願いしています。

令和3年度主な支援内容

【さきかけ志金】

事業名	事業内容	基金からの実施額
コロナ禍における学生への食費等に対する支援	一人当たり3,000円の大学生協利用券を学部新入生1,110名に配布	2,330,000円 (日本学生支援機構からの助成1,000,000円も活用し実施)
コロナウイルス感染症対応支援金給付事業	経済的な影響を受けた学生へ学業継続支援として一人当たり50,000円を133名に給付	6,650,000円
課外活動参加時のPCR検査費補助	課外活動参加時に使用する検査キット購入費の半額(1,990円)を250回分補助	497,500円

【修学支援基金】

事業名	事業内容	基金からの実施額
修学支援金給付	経済的理由で修学が困難な学生へ奨学金として一人当たり300,000円を20名に給付	6,000,000円



PCR検査キット



学部新1年生へ配布した大学生協利用券

インターネット決済サービスによる「クレジットカード決済」「コンビニ決済」「Pay-easy決済」がご利用いただけます。

〈お問い合わせ先〉

高知大学総務部総務課広報室

TEL:088-844-8759 FAX:088-844-8738

E-mail:sj02@kochi-u.ac.jp

詳しくは大学のホームページをご覧ください。

<http://www.kochi-u.ac.jp/shien/message.html>



地方創生をテーマにした日本・台湾の「日台大学地方連携及び社会実践連盟」が発足

本学をはじめとする日本の4大学(高知大学、信州大学、千葉大学、龍谷大学)と台湾の6大学(国立暨南国際大学、国立成功大学、国立中山大学、東海大学、国立高雄科技大学、国立台湾海洋大学)による地方創生をテーマにした「日台大学地方連携及び社会実践連盟」が発足し、令和3年11月16日に調印式が執り行われました。

近年、日本と台湾は、高齢化社会や少子化、地方からの人口流出、地域格差などの類似した社会問題に直面しています。今回「日台大学地方連携及び社会実践連盟」が発足したことにより、日本・台湾の大学がそれぞれ取り組んできた「地方創生」と「社会創造(イノベーション)」の成果を、現代社会が抱えている諸問題と今後発生し得る新しい社会的課題の解決策を見出すために活用するなど、学術的かつ実務的な情報交流が進むことが期待されます。



The Humanity Innovation and Social Practice Project, Taiwan.

令和3年度前期「地方創生推進士」に14名の学生を認定!

この度、新たに14名の学生を令和3年度前期「地方創生推進士」に認定しました。

「地方創生推進士」は、高知県内の高等教育機関(高知大学、高知県立大学、高知工科大学、高知工業高等専門学校)の教育課程において、地域の住民と積極的に触れ合い、地域の課題解決に取り組む経験などを経て地域への理解と愛情を深め、高知をはじめとする地域で働き貢献したいという学生に与えられる称号です。これまでに146名を「地方創生推進士」に認定しており、特に令和2年3月に卒業した「地方創生推進士」は高知県内就職率が53%を超えるなど、高知県内各地での活躍が期待されています。



台湾国立高雄科技大学主催「『鄰家好漁』地方社会的弱者支援コンテスト」で提案コンテストファイナリスト賞を受賞

地域協働学部4年生の森野純夏さん、新田なるさん、同学部2年生の橘高祭さん、竹内風佳さん、同学部1年生の西部花さんらの取り組みが、台湾国立高雄科技大学が主催する「『鄰家好漁』地方社会的弱者支援コンテスト」において、提案コンテストファイナリスト賞を受賞しました。

本コンテストは、日台10大学による「日台大学地方連携及び社会実践連盟」の活動の一環で実施され、今回受賞した提案コンテストファイナリスト賞は、地域が抱える様々な課題に対し独創的な解決方法を提案するプレゼンの中から贈られるものです。

森野さんらは研究テーマの一環として令和3年5月から駄菓子屋「ふいーか」を立ち上げ、子どもや地域の人が交流できる居場所づくりに取り組んでおり、実践から得られた知見を活動に反映できていた点や継続して活動ができていた点が高く評価され、今回の受賞に繋がりました。

第18回金融教育に関する実践報告コンクールで、本学教育学部附属特別支援学校の安岡知美教諭が特賞を受賞

教育学部附属特別支援学校の安岡知美教諭が、金融広報中央委員会が主催する第18回金融教育に関する実践報告コンクールにおいて、最高位の特賞を受賞しました。

本コンクールは、全国の実践報告を対象に、金融経済教育に関する実践報告、研究結果、提言などを広く募集し、特に優れた作品に表彰を行います。

安岡教諭は、知的障害のある生徒に対してゲームなどを通じてお金の大事さを伝える授業内容を行った点が高く評価され、今回の受賞に繋がりました。



体育会剣道部が第40回全日本女子学生剣道優勝大会において8強入りし、敢闘賞を受賞!

本大会は、全国8ブロックから選抜された56大学による団体戦で、学生剣道日本一を決める団体戦の中では最も権威のある大会です。

中四国ブロック代表として出場した本学は、1回戦で愛知大学、2回戦で清和大学に勝利し、3回戦では城西国際大学を代表戦で破り、団体戦では初の全国8強入りを決めました。準々決勝では今大会で優勝した中央大学に敗退しましたが、中四国連盟で唯一8強入りを果たし敢闘賞を受賞しました。



高知大学 受験生サイト

▼パソコンはこちら

<https://nyusi.kochi-u.jp/>スマホは
こちら▶

デジタルパンフレット

大学パンフレットや各学部のパンフレット
をご覧いただけます。

説明会

各地で開催される入試相談会。大学での説
明会、高校での模擬授業など様々な説明会
を実施しています。他にも情報
いっぱい!
ぜひ閲覧して
みてください。

●お問い合わせ先 総務課広報室

TEL.088-844-8100 FAX.088-844-8033

■高知大学のラジオコーナー

高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届
けしています。ラジオ視聴用アプリ「radiko」をダウンロード
していただくと、スマホやパソコンで全国どこでも視聴し
ていただけます。

※写真はイメージです。



FM 高知 81.6MHz

「Monthly 高知大学」【毎月】第4金曜日 10時15分～

放送中

■高知大学古本募金

読み終わった本で高知大学をご支援ください。
高知大学古本募金は、皆様から読み終えた本・
DVD等をご提供いただき、その査定換金額が
高知大学に寄附される取組です。古本募金を通じ
て集まった寄附金は「高知大学さきがけ志金」と
して受け入れ、本学の教育研究・社会貢献活動の
向上のために役立てられます。

本・DVD

↓ 配送 ↓

5冊以上で
送料無料古本募金
きしゃぼん

↓ 査定・寄附 ↓

査定額+100円を
大学へ寄附

大学

＜お問い合わせ先＞

☎ 0120-29-7000

(受付 9:00～18:00)

高知大学古本募金

検索 🔍

運営協賛

古本募金きしゃぼん(嵯峨野株式会社)

■広報誌 Lead への広告募集中!

高知大学は、地域に根差した大学を目指し、高知県内に事業所等を有する企業等を
対象に、「広報誌 Lead」への広告(有料)を募集しています。希望される方は、下記まで
お問い合わせください。

高知大学総務課広報室 E-mail: kh13@kochi-u.ac.jp

■広報誌 Lead 2022春号アンケートご協力をお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で5名の方
に高知大学オリジナルグッズをプレゼントします。(当選
者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます)
右記の2次元バーコードを読み込み、表示されたアンケート
画面にてご回答ください。回答期限:令和4年7月末

新型コロナウイルスに対する本学の対応については、大学ホームページのトップページ「重要なお知らせ」に最新情報を掲載していますので、ご覧ください。

●お問い合わせ先

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

高知大学
Kochi University

総務課広報室

高知大学

検索 🔍

<http://www.kochi-u.ac.jp/>バックナンバーは
こちらから
ご覧いただけます。

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033

〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail: kh13@kochi-u.ac.jp

※誌面の学年と役職は制作時のものです。